

母の 727 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

きょうも子どもと 禅のことは①／細川晋輔 2
作家と画家がであうとき②／長谷川義史 3
一生ものの絵本／代田知子 4
追悼 セなけいこさん／本多慶子、松本育子 6
わたしの原風景④／桂 文我 7
イラスト／とよたかずひこ



JBBY50周年

さくまゆみこ

日本国際児童図書評議会（JBBY）は、今年で50周年を迎えた。その記念イベントが、11月16日に「いま、子どもの本は世界とどうかかわるのか」というテーマで開かれた。

第一部では、世界各地の作家・画家からいただいたビデオメッセージを放映した。どのメッセージからも、作家・画家が現在の世界情勢（特にガザやウクライナをめぐる情勢）を深く憂慮しておられる様子が伝わってきたが、それだけではなかった。デイヴィッド・アーモンドさん（イギリス）やデボラ・エリスさん（カナダ）、グスティさん（アルゼンチン／スペイン）は、本来は美しいはずの世界を暴力で破壊しようとする力が幅をきかせているが、本を作る者たちは創造の力をもって子どもを取り巻く世界を変えていけるはずだと語られ、キャサリン・パターソンさん（アメリカ）は、世界の子どもたちが本を通してお互いに理解しあうようになれば平和な世界がもたらされる可能性があると言われた。ピヴァリー・ナイドゥーさん（南アフリカ／イギリス）が引用なさった南アフリカの故ツツ大主教の言葉「希望とは暗闇にあっても光を見られることである」にもあるように、作家たちは闇の中でも文章を書き、絵を描いて創造しつづけることによって光へ向かおうとしていることが伝わってきた。それ以外の作家・画家のメッセージも、どれもすばらしく、放映時には、おひとりごとにおのずと拍手が沸き起こった。

第二部のシンポジウムでは、作家の岩瀬成子さん、写真家の長倉洋海さん、翻訳家の私がそれぞれの立場で見えていることをお話しした。私は、子どもの本は、「今・ここ」に縛られている子どもの周りに大人があけておく窓だと思っている。あければ「今・ここ」とは違う世界、あるいは「今・ここ」を違う角度から見る世界が展開しているはずの窓だ。だから、子どもの本にかかわる人たちには、「今・ここ」のマジョリティの価値観にとらわれずに、どんな未来を子どもに手渡したいのかを考えながら本づくりをしてほしいと思っている。「今・ここ」とは異なる多様な考え方、価値観を示していかないと、自分の頭で考える人間は育たないのではないだろうか。考えることをAIに任せたきりでは未来がない。

ビデオメッセージもシンポジウムも今後の配信を予定しているので、ぜひ多くの方にご覧いただきたい。（翻訳家）

きょうも

子どもと

禅のことば

細川晋輔

1 戻らない日々

禅語は、心を探するためのみちしるべ。
住職の細川晋輔さんが、
日々の子育ての中で感じたことを
禅語を交えてつづります。

いちごいちえ

一期一会

先日、五歳の長男の運動会がありました。来年から小学生になる彼にとっては、これが幼稚園での最後の運動会です。けれど、障害物競走の出だしで遅れてしまい、それでも一番になろうと、追いつくために必死に走っていました。その姿を見ていたら、こみ上げてくるものがありました。スタートの合図で走りだせるかを心配していた数年前の横顔とは全くちがう顔をしていました。

「一期一会」。たとえ同じ人に幾度会う機会があっても、いま、この時の出会いはふたたび帰ってこない。一生涯ただ一度限りの出会いであるからこそ、一回一回を命がけで臨まなければならないという禅のことばです。

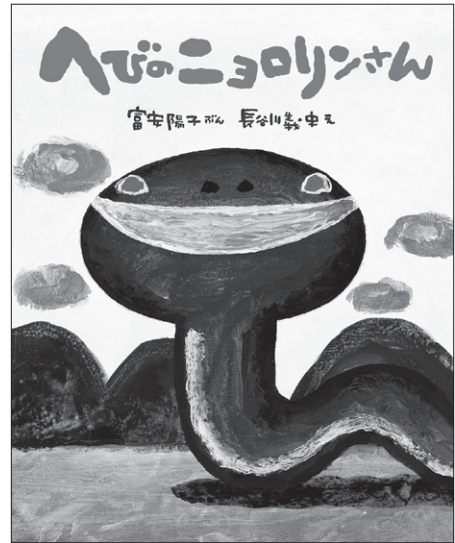
「もう二度とない機会だからこそ今回だけは」と、つい考えてしまう私たち。しかしながら、実は今回だけでなく全ての出来事が「一期一会」であり、最後の機会であることをこのことばは教えてくれるのです。

そう考えてみると、子育ての毎日は二度と戻ることができない貴重な時間です。日々着実に成長していく子どもたちとの日常こそ、かけがえのない瞬間であるのです。

ほそかわ しんすけ 一九七九年生まれ。大学卒業後、京都にある臨済宗妙心寺の専門道場で九年間修行。著書に『禅の言葉とシブリ』（徳間書店）など。三児の父。

作家と画家が であうとき 20

『へびのニョロリンさん』



富安陽子・ぶん／長谷川義史・え
2024年10月刊行

拝啓 富安陽子様

山のあなたの
トメばあさんと
ニョロリンさん

長谷川義史

富安さん。この度はへびさんの絵本のお話に絵を描かせていただきありがとうございました。

富安さんもご存知の通り僕ね、へびさんが怖いんです。へびさんには何も悪いことされたことがないのに僕から一方的に意味もなく怖いんです。そんなへびさんのお出ましになる絵本を描くことは。いいえお優しい富安さんがそんなことおっしゃったのではないでしょう。きつとごなたか押し強い編集者様がぐいぐいとそうお決めになったのでしょう巴年かなんかの。

はてさて腹をくくって筆を持ったのですが、いざ画面に向かいますと僕の手の筆の先からニョロリン、ヘロリン、ニョロニョロリンとあれまあ青いへびさんが出てこられてまして、画面の中を動き回るではありませんか。ときどき赤い舌をシュッシュッヘロヘロと出しながら。つづらな瞳が赤く光っております。

これはもう僕が描いているのではございません、

そう感じました。

へびのニョロリンさんがお出ましです。富安さんの文章の中でもうすでにニョロリンヘロリンと命をあたえられていたのですね。

僕はちょこっと絵の具を出して筆を握ってへびのニョロリンさんのお散歩をお手伝いしたただけのよつに思っています。

また僕はこの絵本の中に出てくるトメばあさんのファンになりました。トメばあさんの朝のご飯のなんと美味しそうなこと。質素であり穏やかでありでも力のみなざる素晴らしい朝のご飯。なっぱのおみそ汁となつとご飯やなんて。なつとも今流行りの小つぶのにおいひかえめでない大つぶのお豆さんのしかりしたにおいのやつでありましょ。

どこの山のふもとでしよつかトメばあさんの一軒家は。きつと遊びに行きたいなあと思います。

僕が訪ねて行くとトメばあさんのことですからどうぞどうぞとトメてくれるでしょう。

夜は小芋の炊いたやつなんか出してくれるでしょう。おつきなとつくりで一本つけてくれるでしょう。月のきれいな縁側でへびのニョロリンさんと一杯やりましょ。

あれまっ！ びつくり。いつの間に僕へびさんが苦手でなくなってますよ、富安さん。

(はせがわよしふみ／絵本作家)

一生ものの絵本

ブックスタートで『いないいないばあ』を手渡すこと

ブックスタートは、二〇〇一年に始まった活動です。赤ちゃんの四か月健診で保健センターにきた親御さんを図書館に案内し、絵本を手渡します。それまで、集団の読み聞かせはしてきましたが、赤ちゃんと一対一ではなかったため、ちゃんと聞いてくれるか最初は心配でした。結果、『いないいないばあ』を見ない子はいない！というくらい、じっと見てくれました。肩間にしわを寄せたりしながら、みんな一生懸命見てくれる。表情が変わらなくても「ばあ」の時に足が動いたり、本の中の動物を追って目線が動いたり、何かしらの反応があります。

図書館を核とする読書のまちづくりを推進してこられた代田知子さん。乳幼児の〇歳児健診と連携したブックスタートの活動や、図書館での読み聞かせで、絵本を数多くの親子に手渡してこられました。『いないいないばあ』の魅力を語っていただきます。



いないいないばあ 松谷みよ子／ぶん 瀬川康男／え (1967年刊)

代田知子

(しろたともこ)

1956年東京都生まれ。埼玉県三芳町立図書館運営相談員（元館長）。日本子どもの本研究会会長。読み聞かせ、ブックトーク、ブックスタート等の実践を通し、子どもの本の普及・研究に努める。著書に『読み聞かせわくわくハンドブック』（一声社）、『ブックスタートの20年』（NPOブックスタート）がある。

それを親御さんに教えてあげると、とても喜んでくれます。

あるお母さんのことが印象に残っています。くたくたにくたびれた様子で、ブックスタートにきてくれました。でも、絵本を読んでいるうちに、だんだんと表情が明るくなって、「赤ちゃんにもちゃんと心があるんですね。きょうは初めてこの子とおしゃべりできた気分」と涙ながらに言ったんです。

ブックスタートは、「子育て支援」を目的としていて、「読書の入り口」とは考えていません。「読書の入り口」と言うと、早期教育と一緒にたになってしまいがち……。赤ちゃん自身が本を読む

でもらう楽しさを実感し、そんな我が子を見て、親御さんも本を読んであげたいと思う、そんな心を育てる活動が、ブックスタートです。

月齢ごとに見てみると

赤ちゃんの時期は、成長著しく、細かく発達の段階があります。『いないいないばあ』と照らし合わせて考えてみましょう。

四か月の頃は顔が大好きです。視覚的な刺激に反応していて、顔がでてるものをじっと見る。この絵本の絵は、背景がすっきりしていて、動物たちの顔に集中できるよう目が強調された描き方になっています。赤ちゃんは、にやあにや

を猫だと思ってはいません。黒い何かが「ばあ」をしていると思うているので、顔がしっかりわかることが大切です。

またこの頃は、音声的な刺激にも反応しています。絵本の言葉は、赤ちゃんへの語りかけがベースになっていて、親御さんが読みやすい。赤ちゃんをあやすように、心地よく読むことができます。不思議なことに、泣いている赤ちゃんに読むと、ほとんどの子が泣きやみます。あやされているような気持ちになっているのでしょうか。言葉がすくいいのです。

六か月になると、予測を立てて楽しめるようになります。「いないいない……」の繰り返しの中で、赤ちゃんは次の展開がわかってきて、「ばあ」を待つようになります。ですので、読み聞かせをする際に、「ばあ」の前に間を置いたりする楽しみ方ができます。

十か月になってくると、読み手と一緒に楽しみたがるようになります。その前までは、まだ絵本対自分なので、絵本の動物が自分に「ばあ」をしてくれていると思っています。でも、十か月の頃は、読み手を見て、「おもしろいね」と確認したがる。本を見ないで、読み手が「ばあ」をする顔を見続ける子もいます。その様子を見て、本が嫌いなのかなと、思ってしまう親御さんがいますが、そう

ではなく、楽しいと感じたことを一緒に確認したい、伝えたいと思っているんです。

一歳になると、だんだんストーリーを追って楽しめるようになり、絵本の幅がぐっと広がります。ですので、一歳前までは、『いないいないばあ』のように、場面場面で楽しめることが大事です。

『いないいないばあ』の魅力

一九八〇年代後半から、図書館で乳幼児サービースが始まり、前述したように二〇〇一年にはブックスタートが稼働しました。この頃までに赤ちゃん研究がだいぶ進みました。

『いないいないばあ』がすくいいのは、刊行当時、今ほど赤ちゃん研究が盛んではなかったにも関わらず、赤ちゃん絵本に必要なポイントがちゃんと入っていることです。作り手の松谷みよ子さんが、よっぱど研究したのでしょう。

二〇〇〇年ごろから、赤ちゃん絵本が急増し、その流れは今にも続いています。その中でも『いないいないばあ』には、変わらぬ魅力があると思っています。

それは、蛍光などの強い色ではなく、明るくやさしい色合いで描かれた、深い魅力のある絵。赤ちゃんは、絵本の中の

動物たちが、本当にいると思っています。絵が強すぎず空想する余地が残された絵だからです。描かれていない部分を想像する余白があるんです。

そして、松谷さん自身の子育ての中から生まれた、すばらしい言葉。親御さんは、あやすように、自分の体験とつなげながら、愛情を込めて読むことができる。赤ちゃんはその愛情を受け取ります。

以前、三芳町の中学校で、中学生が『いないいないばあ』を赤ちゃんに読み聞かせする取り組みがありました。読み聞かせが終わったあとの感想の時間にある子が泣き出しました。「覚えていないけど、お母さんがこんなふうに読んでくれたんだ」と、感動してしまったんです。

たくさんある赤ちゃん絵本の中には、赤ちゃんが見ることだけに研究を尽くし、視覚的な刺激で驚かす絵本があります。それは確かに見て喜ぶけれど、旬の時期が過ぎると忘れられてしまいます。でも、『いないいないばあ』はそういった旬の絵本とは違います。親御さんにとって、子どもにとっても、心を通い合わせたい思い出として、一生ものの絵本になっているんです。

ですから、これからも『いないいないばあ』を大事にしてほしいと思います。



追悼 せな けい こ さん

10月にせなけいこさんが逝去されました。ご冥福をお祈りするとともに、生前交流のあったお二人の追悼文を掲載いたします。

おばけ絵本の第一人者 松本育子

夜更かしする子どもが、おばけの国に連れていかれてしまう絵本『ねないこ だれだ』(1969年、福音館書店)。ぎょろりとした目、だらりと垂れた手、でもどこか愛らしいおばけは、せなけいこさんの絵本作家デビュー作に登場し、唯一無二のトレードマークとなった。おばけは、『ゲゲゲの鬼太郎』が好きだった息子さんや、夜の寝つきが悪かった娘さん、落語家の旦那さんと過ごす身近な暮らしから育まれたアイデアだった。そして、幼い頃からの愛読書『ぼうぼうあたま』や『アイルランド童話集』のハッピーエンドで終わらない物語への嗜好が、おばけと一緒に飛んでゆく、あの衝撃的な結末を迎える展開のきっかけといえるだろう。一目見て、せなさん作とわかる貼り絵の手法で生まれた独特な表情を持つおばけは、「せなけいこ・おばけえほん」シリーズ(童心社)や「めがねうさぎ」シリーズ(ポプラ社)などにも現れて、独創的な魅力を放ち続け、世代を超えて推される存在となった。

『ねないこ だれだ』誕生の50周年を記念した「せなけいこ展」(2019-2021年)の開催に、学芸員として当初から関わった私は、自宅をくまなく調査させていただく貴重な機会に恵まれた。物を捨てることを好まなかったせなさんの自宅には、絵本原画や書籍のほか、古い日記や幻燈のフィルムなどの資料、貼り絵のもととなる包装紙などが大量にストックされていた。それらは、カルチャーセンターで妖怪学を学ぶなど、とにかく勉強熱心で、こぼれんばかりの制作意欲に満ちていて、そしてとても自立心旺盛な表現者であるせなさんの生きざまを雄弁に物語っていた。

主を失った仕事場には、まだたくさんの紙が遺されていて、作品となるよう待ち構えている。その出番はもう来ないことが残念でならない。

(まつもと いくこ/刈谷市美術館学芸員)

怖くて楽しい不思議な世界 本多慶子

初めてせなさんにお会いしたのは、1969年「童話ぐるーぷ 車」の展覧会でのことです。当時のせなさんは絵本作家としてデビュー前で、童画家の武井武雄さんの弟子として学びながらイラストレーションの仕事や創作活動をしていました。せなさんが自分の子どものために手づくりした絵本があると見せてくれたのは、『にんじん』『もじゃ もじゃ』『ねないこ だれだ』の3作。手づくりのダミー本をみて「これはいける」と思いました。従来のいわゆる、しつけのための絵本とはまったく違っていました。せなさん自身の子育てが、「いやだ」というわが子にこうしなさいと押しつけるのではなく、どうなると思う? と問いかけるものでしたから、絵本も子ども自身に考える力を与えるものです。当時の日本にはまだ、そうした絵本がなかったのです。せなさんの絵本づくりとはまず、貼り絵に使う紙は家にあるような包装紙。「包み紙でいいのがあったらとっておいて」とよくいわれたものです。お互いに子育て中でしたので、よく丸善のまんが展に小学生の子どもたちをつれていきました。感激したのは手塚治虫さんに『鉄腕アトム』の本にアトムの絵をかいてもらったことです。子どもたちは大喜びで、その本は今でも宝物です。

また、せなさんとはよく旅行をしました。スケッチブックを広げて町の隅に腰かけて、写生をしている姿がありました。旅行中は古本屋さんめぐりで、中にはいると1時間くらいでこず、私は入り口で待っていたことがありました。

本好きのせなさんのお父さんが与えたドイツの絵本『ぼうぼうあたま』の影響など、幼児体験はせなさんの絵本づくりの原点になっています。絵本はすべて読んだ時の喜びや楽しみが大きければ大きいほど、子どもの心に生涯生き続けています。世代を超えて愛される絵本をありがとう。(ほんだ けいこ/編集者・元JBBY理事)



「せなけいこ・おばけえほん」シリーズ
『ばけものつかい』
1974年



紙芝居『やさしいおともだち』
1974年



紙芝居『かくれんぼ』
1983年



『いらっしゃい』
2019年



『おだんごちょうだい』
2022年

わたしの原風景

46

桂 文我

かつらぶんが／落語家



イラスト／平澤朋子

「私の一番古い記憶は、何歳頃だろう？」と考えたとき、思い出すのが、我が家の前の桜の木の下へ敷かれた筵^{むしろ}の上へ座り、母の横で何かを食べている光景で、いつ頃かを母にたずねたとき、「ああ、三歳くらい」という答えだった。

そんなに幼い頃の記憶が残っているとも思えなかったが、即答だっただけに、本当なのかもしれないし、私が反論するだけの証拠もない。暖かい春の陽射しを浴び、とても気持ち良かったことも覚えていて、^{「そのよつなことは、何度もあったのかもしれないし、それを一番古い記憶と思い込んでいるのかも？」}と考えることにしている。

最近、もっと古い記憶があることを思い出した。

私は今、故郷の三重県松阪市の山間部に住み、仕事が休みで、天氣の良い日の夕方は、田圃^{たんぼ}や畑の道を散歩している。

大都会のように、何となく夜が明け、何となく日が沈むのではなく、田舎の朝夕は、一気に夕方の風情となり、スカッと夜が明けるのが、何とも言えず、うれしい。

先日の夕方、二百メートル程離れた道を、親子四人が歩いている姿を見た。

三十才前後の若夫婦と、小学一年生くらいの男の子と、ヨチヨチ歩きの女の子。

いきなり、女の子が走り出したのを危ないと思ったのが、男の子が抱きつき、その後ろから、大急ぎで若夫婦が追いかけて、二人の子どもを抱っこした。

そのとき、これとよく似た光景で、夕焼けの中、母が私を追いかけて抱っこされたことを思い出し、それが一番古い記憶ではないかと思っただ次第である。

数年前、母は亡くなり、改めて、確かめることはできないが、「恐らく、間違いない」と確信したし、懐かしさで、胸が一杯になった。

田舎の夕方には、懐かしい記憶を甦らせる力があるのかもしれない。

12月の新刊図書！

童心社のキャラクターグッズ

2025 14ひきのカレンダー

いわむらかずお／作

定価1,760円（本体1,600円+税10%）

3世代にもわたって愛されるロングセラー絵本「14ひきのシリーズ」のカレンダー。毎月、森で暮らす14ひきを描いた色彩豊かな絵を楽しめます。「カレンダーシール」つきで、家族のイベントを楽しく書き込めます。



知ってわくわく！ 日本語

オノマトペ／敬語／外来語

各定価2,420円（本体2,200円+税10%）

もやもや解消！ オノマトペ

三田村信行／文

たかいよしかず／絵

どれだけご存じ？ 敬語

横沢彰／文

たかいよしかず／絵

使ってクール！ 外来語

吉橋通夫／文

たかいよしかず／絵



ふだん見聞きしていることばにたくさん
つかわれている「オノマトペ」、相手を
うやまう気持ちを込めてつかう「敬語」、
何気なくつかっている「外来語」につい
て、楽しく学ぶことができます。

単行本図書

まさきの虎

濱野京子／作

こうの史代／絵

定価1,540円
（本体1,400円+税10%）



震災以来5年ぶりに戻った母の実家。真莉愛は記
憶にのこる、ある言葉の主をさがそうとする。



イラスト／とよたかずひこ

2024年12月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第727号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：橋口英二郎
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただきます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●まず、おとなが幸せにいてくださ
い。おとなが幸せじゃないのに子ど
もだけ幸せにはなれません——日本
で初めての子どもの権利に関する総
合的な条例「川崎市子どもの権利に
関する条例」（2000年公布）に関わ
った子ども委員会によるおとなへの
メッセージ。24年後の今、おとなは
幸せにいるだろうか。子どもは安心
して生きているだろうか。 H

●我が子が赤ちゃんだったころ、い
っしょに絵本を読む時間は、もっと
も気持ちが安らぐひとときでした。
にこっと笑ってくれたり、あーう
と声を出して反応してくれたり。絵
本を介して心を通わせたことは、大
切な思い出として親子の日々を支え
続けてくれています。そんな小さか
った子に、とうとう背丈を抜かれそ
うな年の暮れです。 S